HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	横の物を縦にすること
Author(s)	大野, 栄三
Citation	理科教室, 49(1)
Issue Date	2006-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14443
Type	article
File Information	ohno49-1.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

横の物を縦にすること

大野栄三（北海道大学大学院教育学研究科）

「横の物を縦にもしない」とは、面倒くさがって何もしない意であり、不精であることのたとえです。しかし、本稿の表題である「横の物を縦にする」とは、根気よく熱心に励むという意味ではありません。教育の世界では、横書きの英文を縦書きの日本語に翻訳し敷衍することに喩えて、西欧の教育制度や教科カリキュラムなどの様々な教育に関係する物事を日本に取り入れることを「横の物を縦にする」と表現することがあるようです。本稿ではそのことを少し考えてみたいのです。

明治に近代教育が始まって此の方、イギリス、ドイツ、アメリカなどの諸外国を相手にして、横の物を縦にする作業が続けられてきました。先進諸国に追いつき追い越せという頃は、縦にするのもエリートのみの生業であったと思いますが、経済大国になってからは、特別な階層に属していなくても、その時々に注目されている国を頻繁に訪問できるようになっています。

近年はフィンランドが流行のようです。フィンランドの教育を非常に好意的に紹介した記事を新聞各紙で目にする機会が多くなりました。2000 年と 2003 年の PISA（OECD 生徒の学習到達度調査）で、上位に入り続けている国がフィンランドであったことがきっかけでしょう。筆者は、ある疑問が解決できないものかと思いながらそういった記事を読んできました。その疑問とは PISA の報告書『生きるための知識と技能 2』(2004、ぎょうせい)で眼に留まった数値に関係します。

PISA では、リテラシー以外に学習の背景についての調査も行われています。それら質問項目から、フィンランドの教育事情に問題ありと思える質問項目のみを表 1 にあげてみました。質問①から④は学校長もしくはその職名を受けた者が調査対象で、数値は「ある程度はある」あるいは「よくある」と回答した割合の合計を示しています。質問⑤から⑧は日本の高校 1 年に相当する生徒を対象としており、「全くその通りだ」あるいは「その通りだ」と回答した割合の合計です。比較のために 2000 年調査の結果もカッコ内に載せています。生徒の素行に問題があり、ここ数年で改善しているとはいえ日本と比べると悪いという結果になっています。また、数学の勉強が楽しくないと答えた子どもたちは日本と同じくらいです。この数値を知ってからは、フィンランドの教師が修士課程卒

で優秀であることを引き合いに出しながら日本の教師の高学歴化や教職大学院設置を主張する人に会うと、眉につばをつけて話しを聞くようにしていました。社会的背景や価値観から質問の受け止め方なども異なりますから単純に数値を比較することに危うさはあります。しかし、何かとすばらしいと褒められることの多いフィンランドも、それなりに教育問題を抱えているのではと疑問に思っていました。

質問	フィンランド	日本	ＯＥＣＤ平均
①生徒の欠席	56（73）	39（39）	54（48）
②生徒による授業妨害	39（60）	13（9）	40（41）
③生徒が授業をさぼること	34（58）	23（18）	30（32）
④教師の欠勤	20（17）	4（4）	19（17）
⑤数学についての本を読むのが好きである	17.5	12.8	30.8
⑥数学の授業が楽しみである	20.1	26.0	31.5
⑦数学を勉強しているのは楽しいからである	24.7	26.1	38.0
⑧数学で学ぶ内容に興味がある	45.5	32.5	53.1

表１．PISA における学習の背景調査などから

この疑問を解決するには、フィンランドにおける教育のリアルな姿を知らねばならないのですが、新聞記事は期待はずれでした。どなたかリアルな姿を解説してくれないものかと期待していたところ、最近、そうした疑問に答えてくれる本に出会いました。庄井良信他編著『フィンランドに学ぶ教育と学力』（明石書店、2005）です。

詳細は読んでいただくとして、たとえば、フィンランドの子どもの学校ぎらいの傾向については、今回の PISA の結果で「光の強さの分だけ影を際立たせる」ことになり、フィンランドの教育大臣は「今後の課題は子どもの学校における満足感と幸福感」と述べたとあります。また、フィンランドでは大学の基本学位が修士号であり、他の職業にくらべて教師がとりわけ高い資格をもっているわけではないとの指摘もありました。フィンランドの教育の歴史と現状が、正負の両面にわたって書かれています。

本当に「横の物を縦にする」には、お互いの国の教育を良くしようという願いが前提のはずです。優れた理科教科書、実験教材、授業プランをお互いに紹介し交流することは有益です。しかし、背景にあること―福祉先進国フィンランドにおける平等の追求、カリキュラムの大綱化と現場裁量の増加、教科書検定の廃止といった一連の教育改革―を無視し、舶来の権威をつけ、冷静に分析もせずに、使えそうだからと換骨奪胎して、つまり日本の教育行政が進めようとしている競争の教育に都合の良いものへと変更して、様々な教育制度を輸入するのは百害あって一利なしです。そういった輸入業者に眼を光らせるためにも、前掲書は一読しておきたい一冊です。